

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

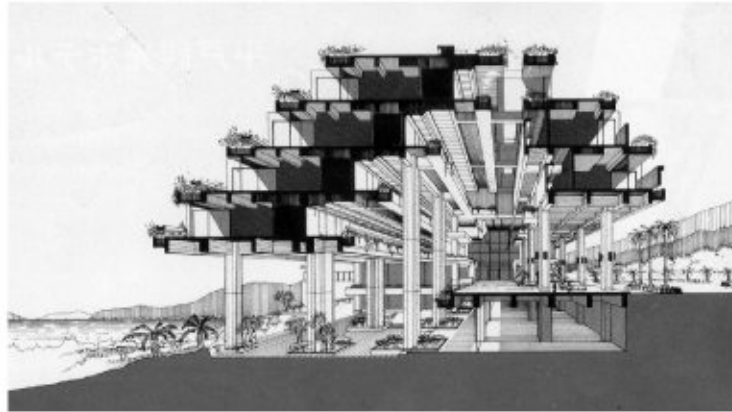
■ 8回 ■ 国場幸房(建築家)
建築家に過酷なコンペ世界

沖縄海洋博がオープンして、開催へ向けての激しい建設ラッシュが過ぎ去ると、気が抜けたような日々が続いた。小さな建物で、ゆっくりに時間を掛けて仕事をしたい気分になっていたとき、突然、長崎の仕事の話がもちあがってきた。沖縄海洋博を見に来られた長崎のホテルオーナー田口氏がムーンビーチのホテルを見られて南国九州の長崎平戸島と同じ形式のホテルを建てたいとの話である。期日が無いので直ぐ来るようにと私がよばれた。

平戸口から船で渡り、建設地である千里ヶ浜の丘陵地の敷地を見せてもらった。平戸大橋が開通する迄の約一年半で完成すること。それが設計と施工と合わせた与えられた期日である。

一〇室余の客室と、或る条件を加えた大宴会場とショッピング等諸々の施設と、全ての客室から海が見えること、ムーンビーチの工事単価で仕上げしてほしいとの条件である。氏は既に3ヶ所のホテル旅館を所持されていたので、今回はそれ以外の設計に関する条件は控えてもらった。

それだけに責任と重圧の掛かる仕事であった。福岡にあつた国建の支所で図面を描くことになった。田口氏は毎週のように事務所に様子を見に来られた。約二ヶ月して基本設計のスケッチが出来たころ、「良い設計が出来ます」と話したら、図面も見ずにすぐさま中洲の街で喜んで宴会をしてくれた。



平戸観光ホテル蘭風の断面

実施設計に入りムーンビーチの断面を更に発展させた自信のある断面空間を提示させてもらった。施工は東海興業が工事を請負った。その頃、九州は建設不況で多少無理して請負っていた。一九七七年七月に一年一ヶ月で工事を完成させて施工した関係社が誇りを示してくれたのは幸せであった。ピロティを含む延べ約四千五百坪の建物が一五億五千万円で完成。予定よ

り一割程安く出来たことになる。

この平戸観光ホテル蘭風は田口氏の永年暖めていた計画であった。それを遠く離れた沖縄に設計を依頼した英断に大変な敬意を感じざるを得ないし、私も若さと情熱で成し遂げたことを誇りに思う。その後この様なかたちで仕事を頂いた事は少なく厳しい現実が続いている。

建築の仕事は、施主・設計・施工の3者が信頼し合うって適切な予算と条件で仕事すれば、信頼に伴う責任よって期待以上の結果を得る可能性も有り得る。世界の建築の歴史を考えてもその様にして建築文化が育つたと信じている。

建築設計の職能に重きを置き、私も会員である日本建築家協会(JIA)が金額の安い方で設計者を決める設計入札方式に異議を唱えているのも其処にある。設計の発注の仕方としてコンペ、プロボ、QBS等を提示させて頂いているが、その他の方法も皆で考えていただけらと思う。

沖縄はひと頃、他府県に比べ比較的コンペ(設計競技)が多いと羨ましがられたことがある。しかしコンペは建築家にとっては過酷な世界である。好きな仕事だけに熱中して夢を膨らますと過度の徹夜と労力も重ねてしまう。大分以前にコンペをやり過ぎて命を落とした人がいると話を聞いた事が或る。又、コンペは、「建築とは何か」を真剣に考え勉強し、回を重ねるたびに力が付くチャンスである。今や世界的に活躍している建築家安藤忠雄氏の著書「連戦連敗」はその事を力説した良書である。しかしコンペは一つの作品を選出するために参加した多くの

方々に経済的な負担を強いることになる。良い物を創るのがコンペの目的であるから、それに参加する人々への経済的な負担を少しでも軽減する予算を計上する配慮が欲しいものである。

コンペの難しさに、シドニー(オーストラリア)のオペラハウスの世界コンペで、遅れて来た審査委員のサーリネンが1次審査で落ちた作品を拾い上げて一等当選にさせた有名な話がある。私は幸運にも6回コンペで仕事を頂き、それが私の代表作の多くを占めていて、しばらく当選率3割台を維持していたが落選が続いたので、数年前からコンペは次世代に任すことにした。



平戸観光ホテル蘭風の外観